

## 海外短期語学留学プログラムの課題

### —長崎大学第1回ドイツ語短期留学プログラムをふりかえって—

嶋津 拓\*・仲井幹也\*\*

キーワード 海外短期語学留学、ドイツ語、フライブルク大学

#### 1. はじめに

長崎大学は、2009年8月にフライブルク大学において第1回ドイツ語短期留学プログラムを実施した。これは大学全体の、「学生の海外派遣・留学を支援する」（第1期中期計画）という方針に基づいて実施されたプログラムであり、本学がドイツ語の海外短期留学プログラムを実施したのは、これが初めてである。本稿では、この第1回ドイツ語短期留学プログラムの実施をふりかえりながら、大学が実施する海外短期語学留学プログラムの今後の課題について考察したい。

#### 2. 実施方法

本学では、全学教育の初習外国語（第2外国語）科目として、ドイツ語・フランス語・中国語・韓国語の4言語が開講されている。レベルはⅠ～Ⅳの4段階に分かれており、通常、Ⅰは1年前期、Ⅱは1年後期、Ⅲは2年前期、Ⅳは2年後期に履修する。初習外国語の海外短期留学プログラムは、夏季休暇期間中に実施され、基本的にはⅢのレベルを修了した学生が参加し、そこで一定の成績をおさめた場合には、Ⅳの単位が得られるシステムになっている。

初習外国語の海外短期留学プログラムは、2006年度に中国語の、そして2007年度には韓国語のプログラムが開始された。<sup>1</sup> このうち中国語のプログラムは、本学が海外の高等教育機関と連携し、当該機関に本学学生のための専用コースを設置する方式で実施されているが、<sup>2</sup> この方式によって実施する場合、ある一定の定員を満たさない時には、コースそのものが開講できない恐れもある。

本学では、全学教育科目（初習外国語科目）としてドイツ語を履修する学生の数が中国語について多い。しかし、その人数は中国語履修者数の1/3程度である。また、2006年度に実施された中国語短期留学プログラムの参加者が8名であったことから、ドイツ語の場合は中国語の場合のような専用コース設置方式を採用することは困難と考えられた。

このため、ドイツ語短期留学プログラムの実施にあたっては、海外の高等教育機関がすでに開設しているドイツ語コースへの派遣方式を採用することになった。

### 3. 教育機関の選定

どの高等教育機関のドイツ語コースに学生を派遣するかという問題を検討する上で最も大きな課題は、「ドイツ語Ⅲ」との継続性をどのように確保するかという点だった。既述のように、中国語の短期留学プログラムは、本学が海外の高等教育機関と連携し、当該機関に本学学生のための専用コースを設置する方式で実施されていることから、「中国語Ⅲ」のカリキュラムを先方に示すことで、その継続性を確保することができる。しかし、ドイツ語短期留学プログラムにおいては、海外の高等教育機関が既設しているドイツ語コースへの派遣方式を採用することになったことから、「ドイツ語Ⅲ」との継続性が担保されているコースを選定することが大きな課題となった。

この問題に関して、学内のドイツ語担当教員間で複数の大学を検討した上で、2008年8月に現地調査を行った。その結果、ドイツ連邦共和国のフライブルク大学（Albert-Ludwigs-Universität Freiburg）が毎年8月（4週間）に実施している「日本人学生のためのサマープログラム」（Sommerprogramm für japanische Studierende）が適当と判断された。

その選定の経緯について、以下簡潔に説明したい。まず、本学ドイツ語担当教員間で、ドイツの語学コースを単位認定した実績をすでに持つ日本国内の複数大学から情報を収集し、とくに評価が高かったデュッセルドルフ大学とフライブルク大学の2校に視察対象を絞ることとした。また、この2校はどちらも、「外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ共通参照枠（Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment）」<sup>3</sup>（以下CEFRと略記）に準拠した成績証明書を発行していることから、本学の「ドイツ語Ⅳ」とのレベル上の整合性にある程度の客観性を持

たせることができるとも考えられた。

この点に関しては、本学の「ドイツ語Ⅲ」と「ドイツ語Ⅳ」はCEFRの基準に置き換えた場合、概ねA1-2レベル、クラスによってはA2-1レベルと考えられるが、実際にデュッセルドルフ大学とフライブルク大学を視察したところ、プレズメント・テストによって本学の単位認定対象となるレベルのクラスに振り分けられた場合は、2校ともこのレベルをあきらかにクリアしていると判断できた。

視察の際には授業見学も行った。見学対象はCEFRのA1レベルとそれよりもやや上級レベルのクラスであったが、その印象を述べると、担当教師の個性、使用教材、さまざまな個性・特性を持つ受講生の構成によって醸し出されるクラス全体の雰囲気等々によって印象の違いが生じることはあったものの、フライブルク大学のほうが教授の仕方にやや体系的が感じられた。

また、フライブルク大学の場合は、日本語を解するドイツ人教師を多数擁し、また日本人スタッフによるバックアップ態勢も整っているの、新たに始動するドイツ語短期留学プログラムを安全かつ確実に実施するという観点から、送り出す側としては安心できた。さらに言えば、ビジネスマンが慌ただしく闊歩する中部ドイツの商業都市デュッセルドルフよりも、自然環境がすばらしい中世からの落ち着いた学園都市フライブルクのほうが、大学生の留学先としてふさわしいと考えた。

#### 4. 研修

フライブルク大学の「日本人学生のためのサマープログラム」(以下、「サマープログラム」と言う)は、1995年に開講されたプログラムで、日本から毎年100名以上の学生が参加している。ドイツ語の授業は、月曜日から金曜日まで毎日4時間である。また、月曜日と水曜日の午後にはドイツ文化に関する日本語による講義が組み込まれているほか、週末には参加費無料の1日旅行や有料の短期旅行が実施される。

ドイツ語の授業においては、コース開始時のプレズメント・テストによって、学生は「入門」と「初級」の2レベルに分けられる。本学外国語科目委員会において、このうち「初級」コースへの参加が認められ、かつ同コースを修了した学生には、「ドイツ語Ⅳ」の単位(1単位)を認定することになった。

授業は、複数指定された教科書の中から担当教師が選んだものと、教師自身が作成した教材を用いて行われた。暗記式・詰め込み式ではなく、実地の会話練習の中で、文法的な決まりや言語の法則性を学習者に自ずと気づかせる点が、このサマープログラムの特徴である。

日本語を全く解しない教師は、上級クラスを担当し、滞日経験を有し、日本語を解する教師は、下位レベルのクラスを担当するが、もとより授業で日本語を使うのは必要最低限にとどめられている。使用される文型や文法項目は、初歩的なものがほとんどだが、それを会話の中ですばやく適切に運用するためには、あらためて訓練が必要であり、学生にとってはそう楽な授業ではないはずである。とくにA1レベルのクラスであっても、教師によっては現在完了形を使用する場合があります、これを会話で使いこなすのは、本学において文法中心の授業を受けてきた学生にとっては、かなり難渋するはずである。言語習得には、瞬時の状況判断能力、瞬時に推論する能力が大きな働きをするが、教師のドイツ語による問いかけや指示にすばやく対応しなければならぬこうした授業は、これらの能力を大いに高めてくれるものと思われる。

## 5. 参加者

2008年度後期にドイツ語を履修している学生を対象として本件プログラムの広報を行った上で、2009年1月に説明会を開催したところ、6名の学生が参加した。また、その後も参加の意向を示す学生が数名いたが、最終的な参加者は4名だった。そのうち単位認定希望者は3名である。

この4名という数字については、ドイツ語より約3倍の履修者数を擁する中国語の第1回短期留学プログラムの参加者数が8名だったことを勘案するならば、また地理的に日本から遠いドイツの場合は、それだけ国際航空運賃が高くなることを勘案するならば、妥当なものだったと言えるかもしれない。

しかし、なかには参加を希望しながら、種々の事情から参加を断念した学生もいたのではないかと思われる。その要因として2009年度の場合は、(a) このサマープログラムの開催時期と本学の試験実施時期が一部重なったこと、

(b) サマープログラムの参加申込時期（3月～5月）の中頃に新型インフルエンザ罹患者のドイツにおける発生が日本でたびたび報道されたことの2点が考えられる。

## 6. 参加学生の評価

研修終了後、参加者4名に対してアンケート調査を実施した。参加学生数が4名と少なかったことから、今回はあえて統計的な処理を施さなかったが、最初に参加動機について尋ねたところ、「外国語科目「ドイツ語Ⅳ」の単位を取得するため」と回答した者が皆無であったのに対し、「ドイツ語能力を向上させるため」と回答した者が2名、「ドイツの社会・文化を直接見聞するため」と回答した者が2名で、学生は必ずしも単位取得のことを考えて、ドイツ語短期留学プログラムに参加したわけではないことがわかる。

つぎに、このサマープログラムの教育内容に対する満足度（5段階評価）について尋ねたところ、「ドイツ語教育」については、「きわめて満足」と回答した学生が3人、「満足」と回答した学生が1人だったのに対して、「ドイツに関する講義」（日本語で行われる）に関しては、「きわめて満足」が1人、「満足」が2人、「どちらとも言えない」が1人であり、「ドイツ語教育」の場合に比べて満足度が低い結果となった。その理由に関しては、アンケートの自由記述欄によると、「ドイツに関する講義」の場合、講師によって内容が重複することもあったことが原因のようである。

## 7. 担当教員の評価

担当教員としては、まずは成功と考えている。参加者はもともとモチベーションが高い学生であるのは当然として、実際にドイツを訪れ、ドイツ人とドイツ語で会話をする体験をし、ドイツの実態に触れたことで、彼らはその学習意欲をさらに高めたようで、それは、帰国後さらなる学習機会の提供をわれわれに求めてきていることからもうかがわれる。「畳の上の水練」ではなく、実際に言語の海で泳いでみて、言語を学ぶ真の理由を参加者自身で発見できたということであろう。参加者の中には「フライブルクに帰りたい」というほどドイツ好きになった者もあらわれたが、授業以外に、午後や夜に用意されていた、毎日数種類もあるリクリエーション・プログラムにも積極的に参加し、さまざまな異文化体験を経て、ものの見方の幅や今回のドイツに限らず、今後未知の世界に分け入る際のしなやかな適応力等を身につけてくれたものと思う。

しかし、同時に問題点も明らかになった。最大の問題点は、ドイツに留学したことによって最高潮に達した学生のモチベーションに応えるさらなる

学習環境が本学にはないということである。

前述のように、「ドイツ語Ⅳ」の履修が免除されるからという理由で、この海外短期語学留学プログラムに参加した者は、今回いなかった。また、その必要性がないにもかかわらず、帰国後あえて「ドイツ語Ⅳ」の授業に出席する学生があらわれた。さらには、ドイツ人教員に会話練習を願い出たりする者も出てきたが、制度として彼らの意欲に対応できる体制にはなっていない。平成22年度から本学にはドイツ人教員がいなくなるが、上記の観点からは、これも問題であろう。

## 8. 今後の課題

上記6および7から、今回のドイツ語短期留学プログラムは一定の成果を挙げたと評価することが可能だろう。しかし、上記5で述べたように、2009年度の場合は、フライブルク大学におけるサマープログラムの開催時期と本学の試験実施時期が一部重なることになった。かかる事態は将来的にも発生することが予想されるので、学生に対してより多くの選択肢を提供するという観点から、将来的には他の時期（たとえば9月）にもコースを設定する必要があるだろう。

また、2009年度の場合、サマープログラムの参加申込から渡独にかけての時期に、新型インフルエンザが世界的に流行した。このため、参加を申し込み、かつまた参加費（参加申込後にキャンセルする場合は、取消時期によって、全額は払い戻されないことになっていた）を支払った後になって、大学の指示により渡独が不可能になるという事態も十分に考えられた。今回は幸いにも無事に実施されたが、将来的にかかる事態が発生した場合に、それに伴う経済的な負担を学生に負わせないようにする制度をあらかじめ整えておくことも必要だろう。

## 9. おわりに

前述のように、このサマープログラムに参加し、一定の成績をおさめた学生は、「ドイツ語Ⅳ」の単位が取得できる。しかし、帰国後の学生の中からは、すでに単位を取得したにもかかわらず、あえて「ドイツ語Ⅳ」の授業に出席する学生もあらわれた。これは、ドイツ語の海外短期留学プログラムに参加したことで、ドイツ語を学ぶこと、あるいはドイツの文化や社会を学ぶこと

の面白さを再認識したためのものである。

ドイツ語短期留学プログラムは、大学教育の中では初習外国語教育（ドイツ語教育）の「最終段階」と位置づけられている。しかし、上記の事情を勘案するならば、そのプログラムに参加した学生の中では、ドイツ語学習の「あらたな始まり」と捉えられているのかもしれない。また、先行する中国語と韓国語の場合は、海外短期語学留学プログラムに参加した学生が、それに参加したことを契機として海外留学（交換留学）の意志を固めたケースもあり、松本久美子（2008）によれば、「海外短期語学留学プログラムは1年間（もしくは半年）の交換留学への足がかり（きっかけ）として機能しつつある」<sup>4</sup> という。海外短期語学留学プログラムに参加した学生の「あらたな始まり」を大学としてどのように支援していくか、その検討も必要になってこよう。また、野口薫（1997）によれば、1996年度までに全国で20を超える大学・学部が、ドイツ語を学ぶ学生を対象にドイツ語文化圏での海外研修を行ったというが、<sup>5</sup> それから10年以上が経過した今日では、さらに多くの大学・学部がドイツ語の海外短期留学プログラムを実施していることであろうし、学生の「あらたな始まり」に対する支援の面で先駆的な取り組みをしている大学もあることだろう。大学間の情報交流も重要である。

### 【註】

- 1 2009年度にはドイツ語と同時に、フランス語の海外短期留学プログラムも開始された。
- 2 詳細は永井智香子（2007）20頁～22頁を参照。
- 3 CEFRは、教育制度の差によって生じる国際的共同作業における言語上の阻害要因を排除・緩和することを目的として、ヨーロッパの言語教育のシラバス・カリキュラムのガイドライン、試験、教科書、等々の向上のために考えられた一般的基準である。
- 4 松本久美子（2008）108頁
- 5 野口薫（1997）217頁

### 【参考文献】

- ① 永井智香子（2007）「第1回中国語海外短期語学研修実施報告－参加学生が書いたアンケートとレポートを中心に－」『長崎大学留学生センター紀

要』第15号

- ② 野口薫 (1997) 「シンポジウム報告Ⅶ：異文化間行動能力の養成と海外ドイツ語研修〈ドイツ語教育部会企画〉」『ドイツ文学』第99号
- ③ 松本久美子 (2008) 「学生交流と大学の国際化－海外短期語学留学プログラム「第1回韓国語研修」を一例として－」『長崎大学留学生センター紀要』第16号

(\*留学生センター教授、\*\*経済学部准教授)